

硬派の地域ブランド研究

北海道大学大学院 農学研究科 教授 坂下明彦

地域ブランドといえば、すでにマーケティング用語としては定着している感があり、農学部^の奴がいまさら何だといわれるかも知れない。まあ、話題といえば、北大の沈没を救ったノーベル化学賞の鈴木先生の実家の^{むかわ}鵲川のシシャモが経済産業省の地域ブランド指定品だというぐらいであろうか。

ところが、私がこのところ力を入れてきた仕事が地域ブランドをキーワードとして結びつくという奇妙な偶然を体験している。その顛末を紹介してみたい。

地域ブランド学Ⅰ 新渡戸の地方学

もともと私の専門は北海道の農業史であり、研究室の看板が協同組合学であることもあり、農協の存立基盤としての農業・農村の特質を歴史地理学的に分析することにより、農協の個性を地帯構成的に浮き彫りにすることを仕事としてきた。その中で、そろそろ北海道も内国植民地根性を捨てて、原料供給地からおさらばし、いっばしの農村文化を構築すべきだと痛感していた。

2008年に文科省の戦略的大学連携支援事業というのが始まり、たまには農学部も頑張れということで応募したところ当たってしまった。科学研究費の弊害でタイトルは「食の安全・安心の基盤としての地域拠点型教育研究システムのネットワーク形成」といういささか長いものである(<http://foodsafety-renkei.jp>)。北海道内の農業基幹大学である酪農大、北大、帯広畜産大が連携して「食の安全・安心基盤

学」という枠組みを設定して、大学院の共通コース(ディプロマ)と農村社会人コース(食の安全・安心マイスター)で教育を行うものである。目玉は、北海道の8ヶ所の「農村サテライト」であり、社会人獲得をめざす都心サテライトの向こうを張ったつもりである。補助金によりポリコムという無機質な双方向のテレビが入ったが、パソコンに飼い慣らされた社会では意外に好評ではあるが、酒拔きの教育とはいかがなものかと北海道巡業の旅は頻度を増している。

8ヶ所のサテライトのうち、道央の栗山、言わずと知れた富良野、北見の訓子府、果樹とニッカの余市の4つが北大担当である。これらは、北海道農業からイメージされる平坦・大規模とは趣が異なり、盆地・丘陵部の凸凹農業である。その分、農業形態は複合的で、こだわり、観光などの多角経営の要素もある。植民地農業脱却の糸口はこの辺にありそうだという感で設定したものである。これを素材として食の安全はもとより、「安心」をどう構築するかと悩んだ末のキーワードが「地域ブランド」である。地域という動かないものに注目し、農村文化を発信しようではないかと考えたわけである。当然、サテライトは教育と地域貢献の拠点であるが、いささか農水省っぽい内容になってしまった。北大側の中心となって活躍している助教の小林国之君はフランスの地方自然公園に目を向けているが、硬派の私としては理屈づくりである。そうなれば、新渡戸稲造^{ぢかた}の地方学、柳田国男

から始まる歴史地理学・民族(俗)学に目を向けなければならない。ちょっと苦手な勉強が始まっている。

地域ブランド学Ⅱ 費孝通の内発的发展論

40歳を目前にして、北海道で足と頭に豆のできた私は、何とか東アジアに逃げのびた。もとい、アジアの農協論を開始した。導きの糸は留学生、その代表がうちの研究室の准教授の朴紅さんである。始めは韓国、そして中国、台湾へと年中行事となった夏の東アジア調査は毎年繰り返されている。とにかく農家調査、という身に染みついた本能は周りにも感染し、17年でうちの研究室もいっばしの東アジア研究の拠点となっている。中国調査は、朴さんの故郷、東北地方(ジャポニカ米の国際的新興産地)から南下し、山東省(日本向け野菜基地)、上海近郊の水郷地帯へと広がり、なんと海南島進出に及んでいる。すべて定点観測(サテライト?)の手法をとっている。

最近では、無錫旅情の「太湖のほとり」に惹かれてか、蘇南水郷地帯にある開弦弓村に頻繁に通っている。ここは、費孝通という中国の社会人類学者が1930年代にロンドン大学で、そのモノグラフにより学位を得たことで有名であり、中国のムラといえば江村(開弦弓村の愛称)といわれる。前出の朴さんが、費孝通のPeasant Life in Chinaを外書購読で使い、2004年にはゼミ生を連れてムラに乗り込んだバイタリティのおかげで調査が始まった。費孝通は3回ほど死にかけ、改革開放路線への転換でまさに不死鳥ともいうべき復活を図った人で、非党員で全人代(国会)の常務委員会の副委員長にまで上り詰めている。その彼が、70歳を超えて沿海部発展のひとつのモデルと

なった蘇南モデルを構築した地でもある。これは、上海を背景にムラと地方拠点(郷鎮)が結ばれ、稲作と養蚕・家内工業と雑業という小農の多角経営の商品化・ネットワーク化が図られ、自生的な経済発展が行われていた歴史をベースとしている。一時期、一世を風靡した郷鎮企業型の内発的发展を唱えたものである。われわれの調査はこのシェーマの検証と変容をテーマとしており、恵まれたムラのバックアップもあり、農家民宿による調査三昧の恩恵に与っている。

この内発的发展論は、実は鶴見和子により柳田国男論と接合されており、中国の地域開発のモデルとしての小城镇開発論として日中共同研究が行われた経緯がある。理論の世の中も狭いものである。今年は、費孝通生誕100周年の年であり、中国とイギリスで多彩な行事が行われている。朴さんはロンドン大学での講演が予定されている。悪乗りして出版を企てているものの、どうも間に合わないようである。

グローバル化が一端頓挫しながらしぶとく生き延びる中で、リージョナル(日中、そしてアジア)な比較研究・交流を行いながら、私たちの足場であるマイクロなムラにあくまで依拠しつつ、協同組合論の立場から地域開発のあり方を追求しようと思う今日この頃である。昨年末には雪道で足を骨折するという道産子の恥をさらし、フィールドワークの自信も地に落ちたので、少しは苦手な理屈こねを真面目にやらなければならない。硬派の地域ブランド研究である。

(さかした あきひこ)